

査をされると男と女に分けられて暗い道を歩いていった。

私達が連れられていったのは牡丹江の街であった。ここより列車に乗せられて奉天の街に着いた。そこで大きな大林組の倉庫に泊まった。夜はソ連軍がやってくるので女の人も男のようにして寝た。

ここで、病気になって何も出来ずに死んでいく人もあった。いろいろな苦勞があったが、生まれ故郷へ帰るまではと頑張って生きた。そして二十一年五月やっと日本へ引き揚げることになったが、そのころには満人の妻となつて暮らしていた人もあった。本当に子供のためと致し方なく行ったのである。

本当に国策移民として行ったのであるがこの結果は残念でならない。思い出して戻らぬことだが、忘れようと思つても忘れられぬことである。老人となつても頑張っているのである。よろしくお願い申し上げます。

引揚者体験の一断片

山形県 武田 莊太郎

東安省東安市三稜通の部隊給水所に勤務していた。こゝは最前線の国境部隊である。家族は妻と長女（三歳）とである。そしてあの八月九日を迎えた。

砲弾の音で起こされた私に「準戦時下令九日一時半」との部隊電話がはいる。すぐ軍装に身を固め家族にも最小限度のものだけを身につけさせすぐ出られるようにした。

二度目の電話は「伝令本戦時下令三時」と怒鳴るような声で終わる。私の行動の指示を受くべく部隊本部に電話した。

そこで受けた命令は「三稜通在住の日本人家族を連れ東安本隊に急げ」だった。

この日本人十人である。東安本部に着いたのは午前十一時半、ここで編成された部隊家族二千五百人の輸送

の命を受けたのである。

午後六時貨車は東安駅を出発、夜だけ走って十一日朝牡丹江着、そこで「南鮮に後退せよ」の命を受けたのだが軍の命はこれが最後となった。

十三日大雨の蚊河駅で下車させられた。なぜここで止まったのか。その元朝鮮人学校に收容される。

八月二十五日夜「確実な情報によれば」と前置きして日本の敗戦が知らされた。校庭の真ん中にうず高く積み重ねた一切の書類、身分証明書、貯金通帳、国旗が焼かれてゆく。

その四日後ソ連軍が進駐、武装解除された。九月の始め「トンカ」の飛行場に送られ格納庫に收容された。そこはすき間もなく幕舎が並び何万人とも知れぬ日本兵が集結していた。

兵は毎口一隊二隊と出て行く。「一足先に日本へ帰る元気でこいよ」「食料が残っているからすぐ持ってこい」と声をかけて行く。空になった幕舎に走った。

しかしこの兵は日本ではなくシベリア行きだった。我々はそこから「馬号（まほう）」という鮮満系の開拓村

に送られたが、ここでは死を待つばかりと脱出、トンカの停車場司令官（ソ連将校）にありつた金の二万円円で貨車を出すことに成功、吉林に着いたのが十月三日昼過ぎであった。しかし我々は無一文となっていた。

十一月の半ば妻は出産、極度の栄養失調の中で生まれた児は一声も出すことなく七日にて死亡、それを追うようにその七日後妻も急逝した。日本人会から支給される高粱で吉林に八か月暮らす。

だが発疹チフスが發生し半数近く倒れていった。このようにして私の妻子とともに吉林の丘に何万とも知れず埋もれたままである。

三歳の長女と生き残った私に昭和二十一年八月八日引揚命令が出たのである。日本に帰れる。夢に見た故郷に心がとんだ。しかし引揚港コロ島まで一か月近くの旅は、無一文の親子にとって死よりも辛いものだった。ただ水だけだったのである。

佐世保に上陸したのは二十一年九月の末、ここ山形にたどり着いたのは十月三日である。妻子を吉林の丘にそのままにして来た私に生涯戦争は終わることはない。